

## 神鋼七十年史を祝う

今回神戸製鋼所七十年を記念として、清楚なる装禎のもとに、他社に見られない社史を編纂され創業初期からの歴史絵巻を繰りひろげ、今日の神鋼の風雪をまのあたり座右にその輝きを見ることの喜びは誠に欣快に堪えません。

殊に編纂委員の御苦心にて、わが辰巳会の実態に就いても特筆頂いたことを深く感謝申し上げます。「膳所の城は一日にしてならず」その格言通り勇往邁進現在の発展目まぐるしき社運の隆昌、洋々たる前途に一層の弥栄を御祝申上ぐる。

(編)

謹賀新年 昭和50年 元旦	
大阪曹達株式会社	坂本財地
三好軍次	千八六〇 熊本市下通二一五一十二 電話(〇九六三)五三一五八五六
大阪府西區江戸堀一丁目五十三番地 電話(〇六)四四三二五五〇一	

牛はその辺りにいる「チロロコイ」牛ではない。でっかい大牛で、こいつをまん中において、その両側を、これまた足の太い大きいばん馬が二頭、牛をはさんで両側につく。その外を二本、ロープを引っぱって、そこへ作業の終わった労務者全部が珠数のようにつながって体制をかためる。

「ヤレッ!!」

頭(かしら)が声をかけると牛も馬も人もいつせいに引張る。山手工場の門につくまでずっと二時間、それは一苦勞だった。

三ノ上の品物が着くと「カグラ」で巻いて板を敷き、コロをおいて引き上げる。

あの神戸製鋼の一時代を画した田宮さんの一、二〇〇ノプレスも分解してこのように運び上げられた。

この作業は昼間はできない。

今の本社の前を阪神電車が走っていた。地下にもぐり込んだのはずつとあとのことで、製品はこの阪神の線路を渡って行かなければならない。だから、ひとまず踏み切りの手前まで運んでおいて、夜中阪神電車の終電が通ったとたん踏み切りを渡る。

もちろん、事前に阪神電車まで、「これこれの品物を何時に踏み切りを渡す」と許可をとっておかなければならない。

昭和五年、これはなんとも不合理だということで、三菱商事を通じてアメリカからトラックの牽引(けんいん)車を三輪運輸が買入れた。日本ではその当時、その車を含めて二台か三台しかなかった牽引車だった。

クレインがない時分のことだ。スクラップの陸上げもすべて人の肩に頼っていた。ハシケから陸にかけた長い板の橋を、ヒョイヒョイヒョイと調子をとりながら渡って行く。

スクラップの山を作るのも人力、すべて人夫が山の上まで持って上がるのだった。

主にこの仕事を請け負ったのが、今の島文工業の前身、岩屋の網元だった島田文一郎だった。

## 金融恐慌と鈴木商店倒産

(読売新聞の阪神五十年⑦⑧転載)

### 震災手形引き金パニック拡大

第一次大戦後の慢性的な不況の中で迎えた昭和二年、全国に金融恐慌が広がった。阪神間も例外ではなく、この恐慌の中にのみ込まれた。金融恐慌は同年一月、時の若槻内閣が震災手形の解決を図る

ため国会に提出した二法案がきっかけだが、この審議の過程で、阪神間とも関係の深かった神戸、鈴木商店の倒産という大事件を引き起こし、パニックを拡大する。

豊年製油清水工場

金融恐慌の引き金となった震災手形というのは関東大震災の事後措置としてつくったもの。震災前に銀行が割り引いた手形のうち、震災で決済できなくなったものを日本銀行が再割引して銀行の損失を救い、日銀の受ける損害は一億円を限度と

して政府が補償、大正十四年九月末までに整理させるといったものだった。

しかし、この震災手形の中には、戦後不況で決済不能となった不良手形も多かった。しかも手形の整理は期限まで完了せず、若槻内閣は昭和二年一月、期限の二年延長と、日銀への補償増額を認める法案を提出した。この法案を審議中の三月十四日、片岡蔵相が衆議院で「東京渡辺銀行が不良貸し付けを抱えて危険だ」と口をすべらせたことから取り付け騒ぎに発展。たちまち全国の中小銀行に波及した。第一次大戦を「大正時代の天佑」として続々生まれた成り金の不良企業を強引に整理しようとした国の政策の失敗だった。

この年四月五日、神戸に本拠を置いた鈴木商店も破産した。最盛時の関連企業八十二社、整理当時でも四十数社を数える同商店の倒産がもたらした波紋は、戦後最大といわれた山陽特殊鋼、その記録を更新した今年の日本熱学倒産の比ではなかった。

鈴木商店は、明治の初め、大阪・船場で砂糖、籐(とう)製品、ベツ甲などの問屋をしていた「辰巳屋」に奉公していた鈴木岩治郎が、のれん分けをもらい、神戸の弁天浜で砂糖商を始めたのがその起り。これを一大企業に育てたのが高知県出身の番頭金子直吉(昭和十九年、七十九歳のとき神戸で死去)である。

金子は土佐の士族の出だが、生家が没落。祝詞(のりと)で文字を覚えながら、郷里で砂糖、質商をしていた。明治十九年、のち、金子とともに鈴木商店の興隆に力を尽くした古参番頭柳田富士松の紹介で神戸に出てきて鈴木商店に入った。

明治二十七年、岩治郎の死後は、柳田とともに、未亡人ヨネを助けて事業を拡大、大正年間の急成長で、一時は既存財閥三井、三菱をしのぐ一大コンツェルンを形成、大正六、七年には兵庫郡鳴尾村(西宮市)など三か所にわが国初の食用油製造工場(のちに豊年製油として分離独立)を建設、尼崎港を神戸、大阪を上回る一大商港にしようとした計画するなど、阪神間とのつながりは深かった。

金子が事業拡大で目をつけたのは当時有力な貿易品目であった台

湾産しようのうである。台湾の初代民政長官となった後藤新平に接近、その販売権を獲得さらに北九州市門司区に「大里製糖所」を設立、製糖にも乗り出した。この二つの事業から得た収益で神戸製鋼所や帝国人造絹糸を設立する一方、商品取引の多角化を目ざして貿易商社日本商業を発足させ、世界各地に支店、出張所を置いて活躍した。以後、第一次大戦に乗じ、経営規模を拡大、大正六年の年商が十五億四千万円。先輩の大手商社三井物産の年商をしのいだ。

当時の勢いについて金子の跡をつぐ人物として囑望されていた日商岩井相談役、高畑誠一さん(八八)(神戸市東灘区住吉町鴨子原)は「最盛期の大正六年、わたしは二十九歳でロンドン支店長をしていたが、本店からくる電話は鋼鉄を買え、豆を買え、銅を買え——とにかく「買え」の一辺倒。それをイギリスはもとよりフランスやロシア相手に売りまくった。当時金子さんから「三井、三菱を圧倒するか、然らざるも彼らと並んで天下を三分するか、是鈴木商店全員の理想とする所也」という手紙をもらったが、決して夢ではなかった」という。

高畑さんは昭和二年の倒産後、関連企業の日商を立て直し、ロンドン時代につちかった実績を生かして、現在の総合商社日商岩井の基礎を築いたが、米寿を迎えた人とは思えない元気で、昔を振り返る。

このころ、金子は「初夢や大隈秀吉奈翁(ナポレオン)」と得意絶頂の句もつくっている。勢いに乗った金子は、ようやく工業地として注目されかけていた尼崎を神戸、大阪に匹敵する一大商港にしようという計画、当時の尼崎町に隣接する武庫川河口東側の大庄村沿岸三十三万平方メートルを埋め立てようとし、県に港湾建設、埋め立て工事を申請、丸島築港会社を設立しようとした。

最初の計画は丸島から東へ伸びた自然の州を利用して防波堤を築き、約二十一万平方メートルを埋め立てて船だまり、荷揚げ場、倉庫などをつくらせて入港船から一斗当たり、五十六銭の入港料か、五銭の荷役料をとろうというものだった。金子は既存財閥の権益がしみ込ん



祥龍寺境内に並ぶ、向うから鈴木よね  
刀自胸像、金子、柳田両氏の彰徳碑。

## 三井からの最後のとどめ

「落人の身を窄(すば)め行 時雨哉」——最盛期、自分を秀吉や、ナポレオンになぞらえて得意の一句をものした鈴木商店の番頭金子直吉が、昭和二年の金融恐慌に直面、台湾銀行に見放されて倒産したときの句である。

第一次大戦で、三井、三菱両財閥の規模に迫った鈴木商店だったが、絶頂に登りつめた大正七年八月十二日、米価高騰による米騒動に巻き込まれ「悪徳米穀輸出入商」のレッテルを張られて神戸市生田区東川崎町の本店を焼き打ちされ、前途に暗い陰がさした。しかし大戦後も拡大を続け、太陽曹達、帝国人造絹糸、帝国炭業などを設立するが、大正九年春の戦後恐慌を境に破局へのスピードを速めた。

金子の銀行ぎらいから鈴木商店の主力銀行は台湾銀行だけだったが、その台銀も金融恐慌の発生で、三井銀行などの市中銀行から短期融資を引き揚げられた。このため、昭和二年三月、台銀は鈴木商店への新規貸し出しを停止、鈴木商店は資金ぐりに詰まり、ついに破産し

だ神戸港の代わりに、尼崎を世界に伸びる「スズキ」の貿易基地にしようとしたもので、「阪神間をS Z K(スズキ)マークの船で埋め尽くす」と豪語、腹心の岡謹一郎を発起人総代に命じ、地元との交渉に当たらせた。

県や、おひざ元の大庄村は大賛成だったが、隣接する東側の尼崎町は「既存の尼崎港の繁栄を奪われる」と反対した。鈴木側はさらに計画を拡大して、尼崎、丸島両港の統合案を出したが、尼崎町議会は「公共事業を一私企業が行うのは会社側の一方的利益を守ることになる」と譲らない。さらに当時大庄村又兵衛新田にあったイギリス系の油脂会社リバーブラザーズ工場が入港税徴収に反対したことや、大戦による資材高騰で当初計画の三百万円の予算が一千万円にもふくれ上がったため、鈴木側もついに断念した。

築港計画を推進した岡氏の長男、重克さん(六九)はいま、西宮市羽衣町で、歯科医院を経営しているが、計画が折を死ねまで残念がついていた父をしのいで話す。

「父はその後間もなく広島で死亡しましたが、あと一歩で阪神間に大貿易港ができたのに残念がついていました。鈴木商店は倒産したが、その関連企業は神戸製鋼、石川島播磨重工、日商岩井、テイジン、豊年製油と現在も一流企業として残っています。父が努力した計画が実現していれば、いま阪神間に大貿易港が残り、尼崎、西宮も別の発展をしたらうにと思うと残念です。いろんな障害がなければ、第一次大戦で列国からかせぎまくった鈴木商店の資金を思う存分、つぎ込んで立派な港ができただろうに……」

尼崎港は昭和四年、浅野財閥の浅野総一郎らによって創立された尼崎築港会社の手で、さらに大規模な埋め立て、築港が実現したが、この時期はすでに重工業化時代に入っており、鉄鋼、石油、電力を主体とする工業用地が優先、金子が描いた「阪神貿易港」の夢は生かされなかった。そして現在の公害都市への歩みを始めた。

た。三井、三菱とともに「天下を三分せん」と自負した鈴木は皮肉にも最後に三井からとどめを刺された形になって刀折れ、矢尽きた。この時点でも、貿易部門はまだしっかりしており、関連企業の中には前途有望のも多かったが、しよせん、給油の望みのない巨艦に過ぎなかった。

現在、全国各地に七百人いる鈴木商店出身者の会「辰巳会」の幹事をしている神戸市東灘区岡本八の六、太陽鋳工会社監査役柳田義一さん(七七)は、金子とともに鈴木商店を盛り立て、豊年製油の初代社長を務めた柳田富士松の長男。大正七年から倒産までずっと金子の秘書をしていた。

「結局、金子さんや、うちの父も鈴木という名家をいただき、思う存分、自分の胸のうちの言い切れなかったこと、合名会社時代が長く、近代企業への脱皮が遅れたことなどが悲劇の底流にあったと思う。後年、金子さんはがんこな拡張論者で、野放図に組織を広げたようにいわれるが、むしろ伸びようとする若手の意欲を吸収してきたのではないか。戦意満々の連合艦隊を率いながら、不利な海戦の場に立った司令長官の苦悩といったものをいつも感じさせられていた」という。

そして「金子さんにしても、父にしても私利私欲はいっさいなし。関連企業の配当を持ち帰ったこともありませぬ。仕事一途の性分と、純粹に国益を思う明治気質の人でした。倒産したといっても一千人近い社員を見込みのある関連企業に振り向けるなどで最後まで踏みとどまり、無一文になって去りました」とことばを続ける。

柳田さんは整理が決まった当日、金子と父の供をして神戸・塩屋の家主ヨネのもとを訪れたが、ヨネは「エレベーターといっしょで降りるときはちよつと気持ちが悪うおますなあ」ともらしただけで動揺の色は見せなかったという。「金子と柳田ががんばってだめなら仕方がない」という信頼感、「このお家さんのためなら」と思い込んだ両番頭の忠誠心——舞台のような場面だが、そこに多くの人材、有望会社を抱えながら、近代企業として大きく脱皮し切れず、

消えて行った鈴木商店の限界を見る思いがある。

鈴木商店の研究を続けている神戸大経済学部の桂芳男助教授（尼崎市東富松五反田六六〇）は「一般に鈴木は、初期の金子と後藤の關係から、政商といわれ、台湾銀行とのつながりによる放漫経営から倒産したといわれるが、決してそうではない。金子が手がけた神戸製鋼所の製鉄、帝国人造絹糸の人造纖維、クロード式窒素工業（現三井東洋化学）の肥料製造のように、いずれも資源の少ない日本ではどうしても必要な事業で、本来、国が公営でやるべきものが多かった。これらの事業は多額の設備投資が必要なので、オイソレと利潤が上がらない。金子は日本経済の発展を考えて、あえてこれらの難事業と取り組んだ。たまたま不況にぶつかっただけ倒産したが、うまく時流に乗っておれば金子の夢は実現したかも知れない。自分個人の利害だけを考えていたのではないことは、鈴木商店が倒産したとき、金子は借家住まいで財産を全然持っていなかったことでもわかります」と金子の立場に同情している。

鈴木商店という巨大な新興財閥をのみ込んだ金融恐慌の荒波の中で、阪神間のいくつかの中小銀行もすべて姿を消した。尼崎市内では、尼崎共立銀行と加島銀行、三十四銀行尼崎支店があったが、銀行の信用低下に伴う郵便貯金増などに押されて、大きな銀行へ吸収されていく。ただ一つ生き残ったのは「尼信」の名で、市内の商工業者に親しまれて来た現在の尼崎浪速信用金庫である。

尼信は大正十年六月六日、現在の本店所在地（尼崎市西本町北通二）で開業、金融恐慌直前は組合員数七百三十七人、預金高六十六万九千円、貸出額五十万円であった。

同金庫は今年三月、五十年史を発刊したが、編集に当たった金田真一常務理事（五〇）（西宮市小松町二の四の二〇）は松尾高一元理事長（昨年死亡）らから「取材」したメモを手に当時の騒ぎをつぎのように話した。

「尼信でも、取り付け騒ぎに備えて神戸の信用組合連合会から現金二十万円を借り入れた。それでも不安なので、三十四銀行尼崎支

店へ三十万円の借り入れを申し込んだが断られたそうです。

そこで連合会から借りた現金の束をカウンターに積み上げて余裕があるように見せかけた。これが功を奏して結局引き出す人はなかったといえます。預金者も組合員であるという連帯感と、創業以来の職員の熱心さが安心感を与えていたのでしょう」。

明治時代から大物町で、機械製造業を続けてきた松川常七尼崎商工会議所副会頭（七九）に当時の状況を聞くと「あちこちの銀行で取り付け騒ぎが起き、仕事先から代金を払ってもらえるかどうか、融資してくれた人が取り立てにくるのではないかと気をもんだものです。しかし当時は半期決算で、ある程度余裕があるうえ、間もなく恐慌が収まり、何とか切り抜けることが出来ました」とむしろ、当時の苦勞を懐かしむ表情を見せた。

金融恐慌は四月二十二日、政府が、三週間の支払猶予令（モラトリアム）を発し、この間、日本銀行が二十二億円を貸し出すとともに、台湾銀行などの救済のため、特別融資などの措置を講じて沈静した。

しかし、中小銀行はとうたされて大銀行支配が確立、産業界も財閥による吸収が進み、鈴木商店の関連会社も、一部を除き大財閥に分割されてその支配下に入った。

賀 正  
昭和50年 元旦  
大分瓦斯株式会社  
代表取締役 松本得一  
本社 別府市北のヶ浜町五番二五号  
電話(〇七七)二四二二(代表)  
自宅 別府市西野口町四番一〇九号  
電話(〇九七七)二二一五〇九

## 〔随筆〕 発奮した大なる貧士

西川 政 一

国の内外共にきびしく、いわゆる激浪の中の狂乱物価の動き、非常識きわまる選挙、合点のゆかぬこと少なからぬ議会、ショック好きのオイルショック、策士家のニクソン及びそのショック。出る者は追わず、来る者は拒まず、採ってもって分析活用すべき今日であると思う。さて先般、毎日紙に次の如き記事が出た。

「日商岩井の西川政一相談役が『世界は一つ』と自費出版して社に復帰した。西川さんは日商岩井の合併をやったの、初代社長に就任したが、新会社誕生の一ヶ月後の朝、突然、人事不省になりこの後言語障害と右半身不随の苦しい二年間の闘病生活が始まった。しかし持前の負けん気で療養の結果、最近ではわずかに右足が不自由な程度で元気そのもの、相変らず口達者のところを見せているがその社会復帰第一作が『世界は一つ』」。

神戸高商時代から旧鈴木商店、あるいは日本バレーボール協会会長としての思い出をつづった三八〇ページ自伝風超大作。西川さんによれば今後『のびゆく葦』と『棒球』の二冊を出版する計画とか」

この記事を見た東京通信病院の林さんという医長から自宅に電話があった。私と同じような患者が五十人以上あるらしく、参考のために小著『世界は一つ』を是非見たいとのこと。人のためになるならば……と思ってお届けした。またその後、文芸春秋社から私の闘病記？を求めに来たが、私は祐筆たる妻にも看護の苦心談があるからこれをコンパインしたもので……ということ、目下その進行中である。

「く最近私の So-called 『先生』が、その新宿の病院の機関誌に「何か書け」という命令？を下されたので、暑いから伊豆のバン

ガローにでも引き込んで書き上げようと思っている。実は、一九六八年（昭和四十三年）の秋、わが社の合併正式調印直後に、私は生れて初めての致命的な大病に襲われた。一九七〇年三月と一九七二年の十月の二回『日商ライフ』を通じて諸兄にご挨拶して以来、今日まで静かに「余生」とやらを送ってきたが、ここにまた余白を若干お借りして諸兄の外の諸君にもぜひ参考に読んでいただきたい。特に山村常務の檄に鑑み、最近の「human assessment」なども活用して、文字通り「人的効率」をあげ、それぞれ誇りをもって絶えざる前進をつづけ、不滅のファイトをもって将来にチャレンジするよう心から念願するものである。

つぎに私がここに強調し、また感謝したいことは、さきに辻社長を中心とした社友会および辰巳会合同の『出版祝賀会』が東京本社十七階で盛大裡に行われたこと。

その案内状に「……喜びを分かち、上梓にいたるまでの並々ならぬ御苦心談を拝聴いたしたく……」「……私共の喜びのおしるしとして記念品を贈呈いたしたく……」との御厚意、また引き続き同月日本工業クラブで一般人の出版祝賀会が開催せられ、数多くの方がたから心あたまる祝福を受け恐縮したのであるが、簡にして要を得たその案内状に「……このご本を読む者の心に、ほのぼのとした温かさとお前への威力を与えてくれます。すっかりお元気になるれたことは御同慶の至りです。西行の如く生れた姿、すなわち裸で全国を行脚し魂の安住の地に逝く」ことを念願される西川さんが、百二十才会のメンバーとしてこの第一作『世界は一つ』に次いで第二作『のびゆく葦』第三作『棒球』の第三部作完成されるよう激励するため……』とあり、もともと生れ故郷、兵庫県全中学校の研修会席上で話した内容を骨子としたものだが、当日は思いがけぬ方々のご参集を得たり、傾聴すべきお言葉や、今後の処世上の示唆や教訓など、いわゆる「Varrity is the spice of life」とい言葉のよりに数多くの先輩方や友達から本当にいろいろなお言葉をいただき、私の人生に非常なるうるおいを与えられ、未来の夢を大きく